
アラカルト（短編集）

素子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラカルト（短編集）

【Nコード】

N3579S

【作者名】

素子

【あらすじ】

様々なシチュエーションの短編を記載予定。基本的に各話に関連はありません。

私の恋人（前書き）

振られて酒を飲む私とバーのマスター

私の恋人

通いなれたバー。隅の椅子に座って荷物を隣に置く。
オーナーでもあるバーテンが、水とおしぼり、突き出しを出してくれる。

ここのはオーナーお手製の甘いものが出される。

私はそれも楽しみにここに来る。

「今日はどれからいきますか？」

オーナーの背後にはずらり、とボトルが並んでいる。

ウイスキーのボトル。

「華やかな香りのやつ」

抽象的なリクエストに、少し笑って凝ったつくりのグラスを出してくれる。

琥珀色の液体が注がれる。ボトルのラベルには花の絵が描かれている。

立ち上る香りは華やかで甘い。

喉を通るとき焼けるほどの度数とは思えないほどだ。

胃におさめると体が熱くなってくる。

シングルモルトウイスキーが私を慰めてくれる。

――振られちゃった。

別れの時には毎回似たようなことを言われる。

君は強いから。俺がいなくても大丈夫だから。

そうなのかな。

一人でも生きていけるように資格を取って専門職を選んだ。

仕事はやりがいがある。毎日楽しい。

でも何故か恋はうまくいかない。

近寄ってくるのは相手なのに、最後は何故か振られてしまう。

「どうしました？ お口にあいませんでしたか？」

オーナーの声に慌てて現実に戻る。グラスは最初の一口を飲んだだけだった。

「あ、いいえ。とても美味しいです。考え事をしていただけです」
もう一口をゆっくり飲む。うん、本当に美味しい。

ゆっくりと酔いが回ってくると、押し込めていた負の感情も小さなことのように思える。

失恋くらいって思えてくる。

同じものをもう一杯頼んで味わう。

照明を落とした落ち着いた店内は、ひどく安心できた。

「悩み事は解消しましたか？」

オーナーが水を出してくれる。

「ええ、なんだか」

気付けば閉店間際の時間帯で、もう他にも客はいなかった。

支払いを済ませて身支度をする。

オーナーも私を送り出したら閉店準備をするつもりなのか、カウンターから出てきた。

「ごちそうさまでした」

ドアを開けて挨拶をすると押し開けたドアがオーナーの手によって閉じられた。

「え？」

状況がのみにめない私にオーナーはゆったりと笑う。

「失恋の傷は新しい恋で癒すのが一番ですよ」

見透かされていた恥ずかしさで私の顔は赤くなる。

同時にオーナーの思惑が分からずに困惑する。

白いシャツに黒いズボンのオーナーは、私を腕の中に閉じ込めた。

「……オーナー……」

「あなたがあまりに可愛くて頼りなげに見えて。お客様と思って我慢していたのに、もう駄目です」

違う。私は可愛くも頼りなくもない。

オーナーの腕の中で私はかぶりを振る。

そんな私の耳元でオーナーは囁く。

「自分がどれだけ可愛いかわからないんです」

たっぷり教えてあげますよ。そう言ってオーナーは笑った。

私が美味しいと言ったから、突き出しをスイーツにしたのだと。

隅の席は独断と偏見によって予約席になっているのだと。

後になって本人から聞かされて私は苦笑した。

私を可愛いと言う奇特な、とびきり美味しいスイーツを食べさせてくれ極上のウイスキーを飲ませてくれる。

――私の恋人。

猫とコーヒー、犬と紅茶（前書き）

理屈屋の彼との応酬。犬派と猫派は相容れない。

猫とコーヒー、犬と紅茶

「世間は犬派と猫派に大別される」

真面目な顔で言い出す彼を私は流す。目は読みかけの本に落ちて
いる。

「あるいはコーヒー派と紅茶派でもいい」

「……何が言いたいの？」

「どちらもゆるぎない価値観を持っていて、決して相容れないとい
うことだ」

私はため息をついて本を閉じた。

彼がこんなことを言い出す時は、たいていろくなことがない。
これまでの経験からよく分かる。

「そうね、両者の間には深くて暗い隔たりがあるね、それで？」

「たとえば俺は猫が好きでコーヒーが好きだけど、君は犬が好きで
紅茶好きだ」

それは事実だ、私達は相容れない。一緒にいても駄目だってこと
？それとも価値観は譲れないから議論すら無駄ってことだろうか。

こんな風に昼下がりに二人でいるのに、意味がないとなると結構
辛い。

遠まわしに別れ話をされているんだろうかと勘ぐりたくなる。

「だから？」

猫が好きでコーヒーが好きで、ついでに可愛い人でも見つけたの
？ 見つけようとしているの？

引導を渡すならきっぱり言って。未練を残さないように、はつき
り言って。

「あなたの価値観と相容れない私とは、一緒にいても意味がないっ
てこと？」

それなら別れてもいいよと言おうとした私は、彼にきつく手首を

掴まれた。

怖いくらいに真剣な目が間近にある。

彼は手を伸ばして、飲みかけの私のカップの紅茶を飲み干して、何とも言えない顔をした。

「何年かけても俺は君を猫好きにも、コーヒー好きにもできなかった」

彼の真意が分からずに、手首をとられたまま続きを待つ。

「だけどこれからも、君に猫とコーヒーの素晴らしさを語りたいんだ」

だから、と小さな小箱を渡される。

中にはきらきらと輝く――

思わず彼を見つめる。うつすら顔が赤い。こんな彼は初めてかもしれない。

「いつか猫とコーヒーを好きになって。でも俺のことも好きでいてくれ」

こつん、と彼の肩に額を押し付ける。

猫とコーヒー。好きになれるときが来るかは分からない。でも。

「議論なら負けないよ」
でも。

とつくに好きになっているよ。あなたのことが大好きだよ。きつといつまでもね。

いつか私を言い負かして。それとも私が言い負かそうか。

ずっと付き合ってくれるんでしょう？ 誰よりも側にいて。

交差点にて（前書き）

車で信号待ちをしている際の一コマ。

交差点にて

少し手前から歩行者信号が点滅し始めた段階で減速し、停止線上で止まる。減速しなければ通過できたけれど、無理はしない。

後ろからクラクションを鳴らされることもなく、私は少しの間ここに留まる。

青矢印信号も表示を終えて、目の前を歩行者が行きかう。

こうして交差点の手前で横断歩道を渡る人を見るのが好きだ。横断歩道が舞台で、目の前を通過するお芝居を見ているような気持ちになる。

買い物袋を提げてゆったりと歩く上品な老婦人。スーツを着て携帯を耳に当てて急ぎ足なビジネスマン。何がおかしいのか、笑いながら集団で歩くミニスカートの制服の子達。

それぞれの人達のそれぞれの日常の一コマが、白い線で描かれた横断歩道の上で束の間脚光を浴びる。

スマートフォンを眺めながら目の前も、足元もお留守な若い男性が人にぶつかりそうになって慌ててよける仕草や、ベビーカーを押して何か話しながら横断歩道を渡っていく仲のよさそうな家族連れは微笑をもたらししてくれる。

私自身は車ばかりで横断歩道をあまり使わない。車で移動して、目的地の駐車場に入庫して用事を済ませればまた車。

だから歩いている人にことさら注目してしまうのかも。

大きな交差点だから一度停車すると長い。横断歩道を行く人達も多かった。

その中に見知った顔を見つけて、はっとした。

記憶にあるよりも髪の毛は短くて、見知らぬ、でもよく似合う色合いのシャツとジーンズを身につけている。背は高くて、それだけ

は変わりようがない。

でもその顔に浮かぶのは柔らかな笑みで、傍らの女性に向けられている。

あんな風に私に微笑んでくれただろうか。あんな風に優しい眼差しを注いでくれていただろうか。ハンドルの上に置いたままの、あの頃には重かった、今は何もない左手の薬指に目がいく。

別れる時にも修羅場はなかった。そもそも修羅場になるほど密な夫婦でもなかった。

お互いの家の事情で結婚し、事情が変わったから別れただけのこと。発展的解消、とあの人は皮肉げに笑った。そうだ、贅沢な高層マンションの中でのあの人はごく稀に皮肉げに笑うか、それよりも無表情のことが多かった。

朝早くから夜遅くまで仕事をして、寝に戻るだけの生活で寝室も別だった。

別れようかと言われた時には既に互いの家まで根回し済みで、サインと印鑑ひとつであまりにも呆気なくままごとのような生活が終わった。

あの時にすがっていれば違っていたんだろうか。嫌だと泣き喚けば違っていただろうか。それでもあの人は意思を変えることなく、ただ煩いと眉をひそめるだけだったかもしれない。

好きに処分してくれと言われた結婚指輪を、今も捨てられずにいる私だけがいつまでもとらわれている。

あの人はもう大事な人を見つけているのに。

結婚することが決まっている形式だけの見合いの席で小娘が一目ぼれをしたことも、嫌われたくないあまりにあの人の言うことに反対など思いもよらずに、ただただ従っていたこともあの人は知らない。

いや、主体性のない人形のようにだと思われていたことなら知っている。

親の命令だから結婚した。結婚したから命令するのが親から夫に変わっただけ。そう思われていたことは知っている。

最初はそれでも希望を尋ねてくれていたのに、もしそれが嫌いだったらと余計な気をまわして結局黙り込んでしまう私にため息をついて、そのうちにため息すらもなくなった。

今もあの時と変わらないのかもしれない。私自身は大切な人を見つけられずにこうして傍観者でいる。

最後まで人形かと呟いたあの人の言葉は、今も耳に残っている。ただ家に戻り、二度と見合いも結婚もしないと親には言っただけに至っている。

学校に通って資格を取って、予約制のエステサロンを開いて限られた人数のお客様に施術している。午前一人、午後一人か二人お嬢様の道楽にしかすぎないそれは私にとってかけがえのない時間だ。

お客様の話を聞きながらゆっくり手を当てていく。人の温かさと柔らかさを手に感じて、そこからじんわりと何かがうまれる。寝てしまうお客様も多い。癒されると言われることもあるけれど、本当は私の方が癒されている。

あの結婚生活で触れ合うことなどほとんどなかったあの人にも、こうして手を置くだけで何かが違ったような気もした。

施術後のリラックスした雰囲気のお客様とお茶を飲んでお見送りをする。

笑顔でまたね、と言われると心が温かくなる。

もう関わることもないだろうけれど、あの人のことがあったから人形は人形をやめようと思ったのかもしれない。

歩行者用の信号は赤になり、私の前方の信号が青に変わる。

アクセルを踏むと車はすべらかに走り出す。すぐに、横断歩道も交差点も後ろに流れていく。

白昼夢のようなひとときは終わったのだ。

美味しい空気（前書き）

異世界に巫女として召喚されてしまった私のこれから。息しろ、走れとな？

美味しい空気

気がつくと、変な場所にいた。

おかしい。

お風呂から上がってパジャマを着て、ベッドに寝転がって本を読んでいたのに。

いきなり体の中がエレベーターで下降する時のようにへんな重力を感じて、次の瞬間には柔らかく温かい布団の感触が消えて何か冷たいものの上に寝そべっていた。

慌てて座り込んであたりを見る。

薄暗い広い場所だった。床は石みたいでひんやりを通り越して冷たい。

手に読みかけだった本を持って、私は呆然とした。

薄暗い向こうから誰かがやってきて、私の側にしゃがみこんだ。

くい、と顎を持ち上げられ視線が合う。

その人は黒い髪の毛に緑の瞳をしていた。黒い服を着て、腰には斜めに革のベルトをつけて、そこから剣を吊っている。

じっと、まるで観察するかのように見つめた後で、額に指先が当てられる。

その人が何か呟くと、指先がかあつと熱くなって額に熱が流れ込んできた。

ぎゅっと目をつぶると、低い声が聞こえた。

「俺の言っていることが分かるか？」

「え？ いや、はい。分かります」

「結界を消す」

よく意味の分からないことを言って、その人は歌うように言葉を

紡いだ。

なんだかカーテンがぼさりと落ちるように、周囲の何かが勢いよく消えた——と思ったら薄暗い空気の向こうから泣き声とか歓声があがっている。

「な、何なんですか、あなた達は。私はどうしてしまったんですでしょう」

「あなたは俺達が呼び寄せた。どうかこの国を救って欲しい。巫女殿？」

「……それって誰のこと。何の冗談？」

とにかく話を、と連れて来られたのは王宮とやらで。やたらに広く、天井は高く、装飾は無駄に豪華で、ドッキリにしては手が込んでいると感心してしまうほどだけ。今はそれどころじゃない。

さっき額に指を当てたこの人は、ストウ・マーク王国の王子とやらでデュオ・デ・ナムと名乗った。

王子って何それ、大体どこの国だ、そんな国名知らないとな脳が考えるのを拒否しそうになったところでデュオ王子は説明してくれた。この国は広く、豊かで、強いらしい。それを妬んだかどうかは分からないけれど、呪いをかけられた。

「これがその呪われた空気だ」

やけに薄暗いなと思ったのは呪われた空気のせいでしたか。なんだ花粉か黄砂が飛んだかと思っていたんだ。

……ちよつと待て。呪い、とか言わなかったか？

「呪いですか」

「ああ、空気は濁り光を通さずに作物も育たない。明るい時間帯でも明かりが欠かせないのだ」

「それはお気の毒ですけどそれと私に何の関係が？」

「空気を浄化してもらおう。巫女殿。そのために呼び寄せたのだから」

言うてはなんだが私はまごうことなき一般人だ。突出した才能があるでなし、人目を惹くようなものもなく、平凡に毎日を過ごしている大事なことから二度言うがただの一般人だ。間違っても巫女とか呪われた空気を浄化とか、できるはずもないし呼ばれる筋合いもない。

ここは一つ、笑ってごまかせ。退却だ。

「どなたかと間違えていませんか？ 私は平凡な一国民です。呪われた空気ってだけでもありえないのに、それを浄化だなんてできるわけがありません」

「いや、あなたは間違いなく巫女で、浄化の能力を持っている。その証拠にこの部屋の空気がどうなっている？」

王子に言われて周りを見るとさっきまで薄暗くよどんだ感じの空気が、なんだか霧が晴れていくように明るくなっている？

CMで見るような空気清浄機がタバコの煙を吸い込んで、透明な空間になったのと現象は似ている気がする。

「私、別になにもしていませんよ？」

「呼吸しているではないか」

「は？ 呼吸？ そりゃしますよ。しないと生きていられません」

「巫女殿が呼吸をすれば、呪われた空気は浄化されて、呪いも無効化されるのだ」

待て。すると何か？ 私は人間空気清浄機として、なんたらマーク国に呼び寄せられたというのか？

あまりにも非現実的な話に額に手をやって、はあああっと大きな溜息をついた。

その瞬間にほわん、とでも形容するような響きを残して部屋が白い光に包まれた。眩しくて目が開けられない。しばらく閉じていてようやく開けると部屋の様子が一変していた。

さっきまでの薄暗さが消えて、普通の空気になっている。

部屋の隅々までよく見えて、嫌な感じもしない。

「今のなに？」

「あなたの浄化能力だろう。溜息一つでこの部屋の呪いを解くとは、さすがだな」

溜息でって、かえって危険だよ。溜息砲か？

と部屋の扉がせわしげに叩かれて誰かが転げ込んできた。

「殿下、王宮の空気が清浄になっています」

「王宮全体か？ 局所的な現象なのか？ 急ぎ調べて報告せよ」

王子の命令に礼をしたその人は慌しく去っていった。扉を見ていた王子が首をめぐらせまた見られることになった。

空気がきれいになって見た王子は、男らしい風貌の人でした。眉は黒くて太めできりりとしているし、緑の瞳は切れ長で、鼻はすっと高く、薄めに引き結ばれた唇は意思が強そうに見える。

体も大きくて剣なんか持っているし結論、近寄りがたい人だった。

「髪が濡れている」

「は？ ああ、お風呂に入ったから」

どうやら向こうからもよく見えるようになったというか。さつき顎つかまれたはずなんだけど、ようやくお互いに観察する余裕が出たというところだろう。

それつきり会話もなくてとても気まずい中、ただただ椅子に座っていた。

もう一度扉が叩かれてさっきの人が顔を出した。

「殿下、王宮のこの階だけの現象のようです」

「そうか、だが巫女殿の力が本物なのは確認できた。以後、国の空気の浄化に当たってもらおう」

「はい。……巫女様。直接話しかける無礼をお許しください。ただお礼を申し上げたくて。あなた様はこの国の希望です。どうぞ、どうぞよろしくお願いいたします。国をお救い下さい」

深々と、ものすごく丁寧な礼をして急ぎお部屋をご用意いたします、とその人は扉を閉めた。

「――という訳だ。よろしく頼む」

「ちよっと待ってください。私は引き受けるとも何とも言っていませんよ。第一、勝手に連れて来られても困ります。呪いの空気って私にも害があるんじゃない」

「そのことなら心配ない。あなたには無害なはずだ。それに一度道ができたから今後の行き来は自由だ。こちらは最大限、あなたの都合に合わせる。あなたはただ、ここに来て色々な場所へ赴いて呼吸をしてもらいたい、それだけだ」

「それだけって、誰がそんな胡散臭い話を受けると思っているんですか」

「あなたが断ったら、この国は作物が育たず、国民はいずれ肺をやられて滅びる。そういうことになるな」

脅したよ、この人。さらっと国が滅ぶとか言った。
何それ、なんで私が国の命運とやらを握らないといけないんだ。

「まあ、疲れているだろう。今日のところは休むといい。こことは別の部屋を用意するので、存分に呼吸してくれ」

そう言って王子はすっと立ち上がって部屋を出ようとした。

って置き去りか？ 文句を言おうとした絶妙のタイミングで王子が振り返った。背中に目でもついているのか？

「そう言えば名前を聞いていなかった。俺は名乗った。あなたは？」

「――かおる。立花 薫です」

「カオル、ではお休み」

今度こそ王子は出て行った。しばらくしてから扉が元氣よく叩かれた。そこに良く似た顔をした双子が現れる。

「失礼いたします。巫女様のお世話と警護を任されました。双子の弟でデライト・ラング。私は姉のレフトウーラ・ラングと申します。どうぞよろしくお願いいたします」

「巫女様、よろしくお願いします。俺、感激です。この部屋の空気、なんて綺麗なんだ。俺、絶対巫女様の側を離れません」

感激やな弟と冷静な姉か。二人とも薄茶色の髪と琥珀色の目をしている。

外見から年は分らないけれど、そんなに私と離れてもいないみたいだ。

「まだ事情が飲み込めませんが。立花 薫です。カオルって呼んでください」

「カオル様。ではこちらへどうぞ」

そう言われて案内されたのは、さっきまでとは別の建物だった。部屋が広い、豪華、ベッドには天蓋までついているよ。どこのお城ホテルだといったくらいにすごくて、油断していると口があんぐりと開いてしまいそうだ。

「入浴は済まれていますね。なにか軽いものでも召し上がりますか？」

「いいえ、結構です」

「ではお休みのご用意を。こちらでも夜着は用意しておりますが、どうされますか？」

そう言って見せられたのはリボンとフリルのつきたいわゆるネグリジェというものだろうか。フリフリ具合がとてつもなく恥ずかしい。

「ええと、私には似合いそうにないのでこれで寝ます」

「そうですか。どういふところがお気に召さないのでしょうか」

「お気に召すものにも、私に着られる方が勿体ないと言うか。すいません、フリフリが苦手なんです」

「では大人しめなものををご用意いたしますね。お休みなさいませ」

そう言われて一人になった途端に、あちこちを見て回る。探検ですよ、ええ。あちこちの扉をあけて引き出しもあけてみる。

うわ、すごい。本当にお城ホテルだ。興奮してすっかり鼻息が荒くなっているからえらく空気の浄化が進む。気付いたらクリンエアですよ。いくら私には害はないとはいえ、あんまりいい気持ちじゃないから綺麗な空気にはほっとする。

人が何人眠れるんだ、っていうくらい広いベッドの上でごろごろ

転がりながら、これからどうなるんだろうと思いながら図太くも眠ってしまっていた。

「――オル様、カオル様。お早うございます」

「う、うう。日曜日なんだからもっとゆっくり……ってここ」

「殿下がご朝食をご一緒にと伝言をよこされています。お断りなさいますか？」

「でんかって、……ああ、昨日の」

目が覚めても昨日のことは夢じゃなくって、豪華な寝室のふっかふかな寝具に包まれていた。

レフトウーラさんに手伝ってもらいながら着替えをして顔を洗って、薄く化粧されて髪型を整える。朝から何でこんな窮屈な格好をしないと駄目なんだろう。王子の待っている食事の間に着く頃には早くもうんざりしていた。

王子はやっぱり黒い服を着てそこにいた。

「よく眠れたか？」

「お早うございます。おかげさまでぐっすりです」

なんか精神的に疲れたからね。内心でぼやきながら席につく。長いテーブルの端で、ここは昨日浄化できなかったところらしく、王子の姿もなんとなくぼんやりしている。そのうちにテーブルの上に皿が載せられる。それを見ておや、と思った。

なんか質素。パンとスープ。果物が少し。

ホテル、じゃなかった。王宮の朝食ならもっと、こう、なんていうか、皿が載りませんか、世界の珍味とかあってもいいんじゃないかと。

いえ、勝手な想像だけだね。

こんな考えが伝わったのか向こうから話しかけられる。

「質素だろう。だが今国内ではあの呪われた空気のせいで、作物の生育が不良だ。民の食事もあるが、貧しい。そんな時に王家が飽食を貪っているのは民に示しがつかない。この呪いが解けるまで食事は民と同じものにしていくのだ」

王子、偉い。困っている国民のことを思って同じ食事にするなんて。

「料理人は腕の振るい甲斐がないと嘆いているが。どのみち食材も日々乏しくなっていく。備蓄はあるが呪いが続けば心もとない。他国からの輸入も足元を見られて価格が高騰しているしな」

目の前の料理を見ていただきます、と小声で言ってから手をつける。一生懸命料理したのが分かる、スープの野菜は絶妙の火の通り加減だ。パンだって固いけど小麦の風味は十分だ。果物も残さずいただいて手を合わせる。ご馳走様でした。

「それで私はどうすればいいんでしょうか」

「こちらで国内をまわってくれればいい」

「でも、私にも生活があります。ずっとこちらでは困ります」

「あなたの都合のいい時でいい」

話し合って週末なら、ということになった。金曜の夜から日曜の夜まで。祝日があったらその前夜から当日の夜まで。

「報酬は？」

聞かれてきよんとする。ええと、ファンタジー小説とかで呼ばれちゃった勇者とかなんちゃらに報酬ってあったっけ。

「あなたのことは国が総力をあげて対応する。何でも望みを言ってくれ」

「と言われても」

お金をもらったって日本で使えるわけじゃないし、宝石なんかそぐわない。

それに週末だけこっちに来て呼吸するだけでいいんなら。

「別にいらないです。王宮に泊まれるだけでもいいし、各地に行ったらその土地の風景を見るとか食事とかできるわけですよね」

「ああ」

なら週末ごとにリゾート旅行のようなものじゃないか。しかもタダで。

むしろ申し訳ないくらいの条件の気がする。

「報酬は本当にいいですよ。あ、もし浄化が済んで作物がちゃんと取れたら、それで美味しい料理作ってください」

「そんなことでいいのか？」

会話しているうちにここも綺麗になってきたらしい。さっきよりも王子がはつきり見える。はい、と頷くと欲がないとかすかに笑われた。うわ、王子の笑顔は危険かもしれない。

「では、話がまとまったところで、早速だが走ってもらおう」

「はい？」

「どうすれば効率よく大きな呼吸ができるか考え合わせて、走ってもらうのが一番だと結論が出てな」

……私、異世界でマラソンランナーですか？

ホタルノケイ（前書き）

不思議な場所での人外×私の話。

ホタルノケイ

眠りからさめたと思ったのに真っ暗だった。
自分の手も見えない真っ暗な闇で、アパートの部屋はこんなに暗くならない。

きよろきよろと周りを見回しても何も見えない。

「ここ、どこ？」

声に出してもなにも帰ってこない。

と、ぼうっと暗闇に光る黄緑の蛍光色。

「うわあああっ」

「情けない悲鳴を上げてしりもちをついてしまった。暗闇に光る穏やかな黄緑色。

恐る恐る近づいてみる。

「何、これ」

不規則に発光と明滅を繰り返す、軟体動物？

こんなの見たことない。

距離をとって観察していると、ふいに触手のように軟体動物の一部がびよーんと伸びて、こっちに向かってきた。

こっちくん。そう思ったのに、それはぺたりと顔に張り付いた。

「ふぎやあああっ」

今まで上げたことないわ、こんな悲鳴。やみくもに手を振り回し

て触手もどきを引き剥がし後ずさりしようとする。

ちなみに腰は抜けた。

謎の物体もびくっと波打って、伸びた触手もどきが元に戻った。そしてさっきよりは早いサイクルで明滅している。

顔に手をやってもとりあえず何ともなっていないようだ。

安心しつつしばらくすると腰もちゃんとなったよう。

立ち上がってぐると見渡しても、どこまでも続く闇しか見えない。

ここにいるのは、自分と得体の知れない軟体動物だけのようだ。

とりあえず、この軟体動物から離れよう。そう思って一步步く。

ぐにぐにとその場で変形していた軟体動物が、ぴくっとしたかと思うとずり、と距離を詰めてきた。

げっと思ってもう一步後ずさる。もう一步分近づいてきた。

私に何のご用でしょう。私の方には用もないし、お近づきになりたくはないのでこれにて失礼させていただきます。

軟体動物相手に、何故か頭の中で敬語で文を組み立ててそろそろと後ずさりして、大腿に歩き出した。

背中を見せたらやられる気がして後ろ歩きで遠ざかる。

それなのに、軟体動物はずりずりと近寄ってくる。

体の一部をのぼして地面をはい、びよんと進んだ後で残った体を引き寄せる。

収縮と伸長を繰り返して、器用な動きを見せるのにちょっと感心するけれど、いやいやそうじゃないだろうとはっとする。

「なんで付いて来るの？」

私が止まれば軟体動物も止まる。動くと動く。

体温や呼気に反応しているのか？ そんなことはどうでもいい。怖い。ここがどこかも分からないのに遭遇した物体が不気味すぎる。

くると反対を振り返って早足で歩く。そっとうかがうと軟体動物がついてくる。

小走りになる。ついてくる。

走る。ついてくる。

全速力。ついてくる。

「いやあああ」

真っ暗闇の中、訳分らない物体と追いかけてっって何の罰ゲーム？

ろくでもないことばかり考えながらそれでも走っていたのに、後ろを見ると黄緑色に光ながら軟体動物がついてくる。

何のホラーだ。

頭が真っ白になった途端に足元がお留守になった。

自分の足につまづいて派手に転ぶ。地面、地面といっているのか分からないが、それはどこまでも平らでひんやりしていて。

当然ながら勢い良く激突したら、痛い。

痛みに涙が出てくる。でも起き上がらないと追いつかれる。

捕まったらどんなことになるのか想像がつかない。

肘で上体を起こした時、ずりずりと軟体動物が目の前に現れた。

終わった。

私の目の前で軟体動物が触手もどきをゆっくり伸ばしてきた。

それはちよつとためらうような様子で顔の手前でちよつと止まった。そして、さっきみたいになペタリと先端を顔につけた。

顔の上を移動して、それが涙に触れた。

目の前で軟体動物のくせに硬直したように動きが止まる。触手も
どこから本体？ に黄色の光の筋のようなものが走って、それまで
黄緑色の蛍光色で一定のリズムで明滅していたのがいきなり赤とか
黄色とか青とか、色々な色で激しく明滅した。

それがなんだかビックリしている時の反応のような気がして、ひ
としきりその狂騒のような明滅が落ち着くのをこけた姿勢のまま見
守ってしまった。

しばらくして元の黄緑色の明滅に戻った軟体動物は、そろりと触
手を頬に移した。

こわごわと指先で触れているかのように接触点が小さかったのが、
手のひらになったかのように面積が広がって片頬を包むように触れ
てきた。ほのかに温かくて弾力があるのに柔らかい、不思議な感触
だった。

「ここがどこか知ってる？」

呼びかけても反応はない。ぼうっと黄緑色が明滅した。

「あんたも迷子？」

また明滅した。

それ以上逃げる気もなくなって、そのままごろんと横たわる。

目を閉じて、目を開けても闇の色。これが夢なら起きたらさめ
るはず。そうあってほしい。そうでないと困る。

体を横向けて小さく丸まる。閉じた目蓋ごしにぼんやりと明滅す
る黄緑を感じた。

この光、何かに似ている。そう思いながら私は睡魔に負けた。

目を開けてもやっぱり闇の中。側には変な軟体動物。

失望しながら立ち上がる。どこに行くあてもないけれど、足を動かしてみる。軟体動物はずりずりについてきた。

こんな中でも道連れがいれば、まだ気もまぎれるかもしれない。そう思っただけで歩き出した。

ぺたぺた、ずりずり。その音だけが響く。

私と、この軟体動物のほかには動くもののいない、生の気配のない闇の世界。

ここはいったいどこで、どうして私はこんな所にいるんだろう。考えても答えはないし、軟体動物には会話は通じやしない。

それでも独り言であーだこーだ言いながら歩き続けた。

そのうちに問題に直面する。

睡眠はなんとかなかった。その他の欲求だ。ここには水も食べ物もない。

入ってくるものが何も、ない。

恐ろしい予感にぶるり、と震えがはいのぼる。

タイミングよく、軟体動物がぼうっと明滅した。

「あんたは何を食べるの？ エネルギー源ってなんだろう」

話しかけても返事が返ってくるわけではない、返ったらその方が怖い。それでも話しかけてしまうのは、そうでもしないと不安に潰されるから。

休憩で座ると、ずり、と近寄ってきた。

にゅつと触手が伸びてくる。それを手で握って握手もどきな構図になった。

未知の生物との異種交流か。また触手から黄色の光が走る。軟体

動物は虹のように光った。

綺麗だと思った。

「あんたの名前はなんていうんだろう。黄緑色の光が何かに似ているんだよね」

そう言うと、ぼうつと黄緑色に光った。その光り方でああ、と悟る。

「あんた、蛍みたい。蛍かあ。蛍、ほたる……ケイって呼ぼうか」

蛍光黄緑なんだからぴったりだ。ケイ、と呼んで触手を握った手を握手のように上下に振ると、ケイはその動きにあわせて光った。

名前を付けたらなんだか可愛く感じられる。

でもうっかり穴から侵入されても困るので、動きには注意して話しかける。

「あんたがなんでこんなとこにいるかは分からないけど、私もね、仕事が終わった週末でアパートで寝ていたはずなんだけど」

ぽつぽつと話す。一人暮らしでアパートの二階に住んでいること。大家さんはちよっとお節介だけど面倒見のいい人なこと。仕事は難しいこともあるけれど楽しいこと。最近は通勤の自転車にはまって、休みの日も自転車であちこちに出かけること。

なんてことはないたわいない日常だけど、こんな非日常に放り込まれるとたまらなく貴重に思えてくる。

「早く、こんなとこから出られたらいいね、あんたも私も」

返事のかわりか、ケイが光る。手の中の触手がすり、と手の平を

こすった。また立ち上がって歩き出す。ケイは触手を戻してずりずりと移動する。

疲れるまでそうして歩いて、また地面に腰を下ろす。

「おなかすいた。喉かわいた。……あんたって食べられるのかな？」

うによっと伸びてきた触手を歯で挟むとケイがびくうとした。ぺろ、と舌先で舐めると何の味もしない。その感触に驚いたのか虹色明滅がひとしきり続いた。

「ごめんごめん、食べないよ。ケイ。ああ、そう言えば自己紹介していなかったっけ。私はね、滝田ゆかりっていうの」

ケイが落ち着いた頃？ そう言って笑う。こんな軟体動物に自己紹介したってどうしようもない。

分かっているてもこの世界の道連れはこのケイしかない。

私は今の生活とか昔の思い出とか、どうでもいいことをケイに向かって話し続けた。

そのうちに眠くなってうとうとする。

ケイの触手がゆっくりと頭を撫でる。なんだか人間くさくて、笑えてしまつて、お休みと呼びかけて目を閉じた。

目がさめるとケイを抱きしめていた。ほんのり温かくて安心する。ケイがもぞもぞと身をよじっているのを無視して抱え込むと、なんだか蛍光ピンクに発光した。

首がつらいので、そつとケイに頭をもたせるとものすごく気持ちがいい。

「ケイ、あんたって枕としては最高級かも」

半分寝ぼけたままうつとりと呟くと、ケイがいつもより抑えた光量で柔らかく明滅する。

「お休み、ケイ。もうちょっと寝かせて」

二度目の眠りはひどく気持ちが良かった。

意識がはっきりしてくると私はケイを抱きしめたまま、ケイがびろんと体を伸ばして体を覆うような形に変形していた。どうりであったかいと思った。

ケイも寝ているのかは分からないけれど、明滅の間隔はいつもよりゆっくりで光も抑えられている。

不思議ないきもの。そう思いながら布団になったケイを眺めていた。

やがていつもの黄緑の光が強くなってきて、うにょんとケイが収縮した。すると体の上にあったものがいつものケイに戻っていく。

「布団になってくれたのかな？　ありがとう。……なんだか寒いね」

ぶると体が震える。ケイが包んでいたのがなくなったからだろうか。

そう思いながらまた立ち上がる。

でも力が入りにくい。そういえばずっと食べていないし、飲んでいない。

こんな所で座り込んでも救助が来るとは思えない。だから叱咤してどうにか歩き出す。

ひどく寒くなっていくのに、体は熱い。喉がからからで頭まで痛

くなってくる。

とうとう、それ以上歩けなくなって膝をつく。

ケイが側によってきた。本体をなでると温かいはずがひんやりと冷たく感じる。

あれ、と思っている間に座っているのも辛くなって、体を横たえる。

ケイが目の前にいる。手を伸ばすと触手がその中にすべりこんだ。

「ケイ、なんか、体が動かなくなっちゃった。あんたが何を食べるのか知らないけど、もし私が駄目になって私を食べられそうなら食べ」

体がどんどん重くなる。

ケイが触手を肩において軽くゆさぶるようにしてきた。ちょっと、その仕草ってものすごく人間くさい。

くすりと笑って、ケイを撫でる。

変な世界の変な相棒。蛍みたいな軟体動物。

「ごめん、ケイ。もう目が開かない」

ひび割れた唇からそんな言葉が出る。唇が乾いて割れたのかうっすら血の味が口の中に広がった。

最後の光景はひどく早い明滅を繰り返す、ケイの蛍光色。

次に気付いたとき、目に入っただのは白い天井でアパートの木目のそれじゃない。

黒の世界から今度は白の世界に來ちゃったのかな？

そう思っていたら、聞き覚えのある声が聞こえた。

「滝田さん、ああよかった。あなた、肺炎で一時危なかったのよ」
顔をそちらに向けると泣いて化粧が崩れかけた大家さんがいた。
大家さん、と言うと、泣き笑いの顔になった。

「もう、どうなることかと思ったわ。この人に感謝しなくちゃ。あなたの隣の空き部屋を見学にいらしたんだけど、あなたの部屋が昼間なのにカーテンが閉まっていて、隙間からは電灯がついているのに気付いてね。几帳面なあなただから変だなあと思って電話をしても反応なし。

携帯にかけたら中から聞こえるからチャイムを鳴らしても出てこない。だから、鍵を開けたらあなたが床で倒れていて……」

そう言われてぼんやりと思い返す。金曜の夜、風邪気味で早めにベッドに入ったはずだった。

それがなんで床に倒れていたんだろう。

「今日は何曜日ですか？」

「火曜日よ。あなたを見つけたのが月曜日の昼だったの。私ったら倒れているあなたを見た途端、どうしていいか分からなくなっちゃって。そうしたらこの人が救急車の手配をしてくれたり、冷蔵庫の氷で冷やしてくれたりして」

言われて大家さんの斜め後ろに立っている男の人に気付いた。
大きくて年上のように見える人だった。

「あの、ご迷惑をかけてすみません。助かりました」
「いや、俺はなにも」

言葉少なく返したその人は、それでも目がさめるまで付き添ってくれていたらしい。

その人は一之瀬^{いちのせ} 蛍^{けい}と名乗った。

結局私は三日入院してアパートに戻った。海外在住の親からは盛大に小言をもらって、大家さんに詫びの品をもっていくと一之瀬さんが隣に入居したと聞かされた。

慌てて追加のお菓子を買って、私は隣の部屋のチャイムを押した。

「はい」

「隣の、滝田です。無事に退院できました。これはお詫びとお礼の品です」

「わざわざどうも。俺も引越しのあいさつをと思っていたのでこれをもらってくれますか？」

品物を交換するような形になって、二人で笑う。

そうしてお隣の一之瀬さんとは顔を合わせた時のあいさつからはじまって、おすそ分けとか仕事のついでにもらった優待券とかを融通しあうようになり、そのうちにそれが映画やドライブ、食事の誘いに変わっていった、まあなんというかお付き合いする仲になった。今はお互いの部屋を行き来している。

蛍は私より随分年上で普段は落ち着いていて頼りがいがあるのに、びっくりするくらいに物にぶつかる。

そのギャップも蛍の魅力だ。

その日は蛍の部屋にいた。DVDを見て、私は二人分のコーヒーを淹れマグカップを両手に持って蛍を呼ぼうとした。

蛍は隣の部屋に入ろうとしていた。ドアは15センチほどしか開いていないのに、そのまま通ろうとして派手にぶつかっていた。

どうして見えているのにぶつかるかな？

笑って声をかけようとした時に、蛍の低い声が聞こえた。

「全く、ニンゲンというのはやっかいだ。こうまで可動性に乏しいとは」

え？

今なんて言った？

マグカップを持って固まる私の前に、部屋から本をとってきた蛍が戻ってきた。

「どうした、ゆかり？」

「ううん、なんでもないよ……ケイ」

笑って本を脇に挟み、片方のマグカップを取り上げた蛍は手の平で頬を包んだ。

その感触は何故かよく知ったもののように感じられた。

梅宮と私とメガネ（前書き）

目の悪い人がメガネメガネと、メガネを探す姿はいい

梅宮と私とメガネ

「う……ん」

寝返りをうって枕に顔を押し付ける。下半身は温かいのに肩には布団がかかっていなくて、寒い。ベッドもいやに硬い。

もそもそと寝心地がいいように姿勢を変えて布団を肩まで引っ張る。布団も軽いなあ。私としては奮発したはずの羽根布団だけどこまで軽かったつけ。

そんなことを思いながらのぼした足が、何かに触れた。

……なんでベッドに異物が？

目を開けるとぼんやりした世界が広がる。目が悪いから輪郭は滲んでいる。

それはいつものこと。

いつものことじゃないのは、ここが私の部屋じゃないこと。

第一ベッドにすら寝ていない。足をつつこんで肩まで潜り込んでいるのは部屋にはないはずのコタツだ。

ここはどこ？ 私是谁、は分かっているのでもあいいがここはどこだ？

起き上がってみた天板の上には麦茶の入ったコップが置かれている。

そしてこっちを向いてコタツで寝ている塊は。

顔を近づけてぼやけた輪郭を確かめる。静かな寝息を立てているのは……。

「梅宮？」

私の声に眉間に皺をよせた梅宮が身じろぎする。会社の同僚の梅

宮がなんで寝ている？　ここが私の部屋じゃなかったら、梅宮の部屋？

あわあわしながら固まっていると、ぱちりと梅宮の目が開いた。少しの間じつとして、目線で私を見上げてくる。

「お早う。起きたか」

「え、と、ここって梅宮の部屋？　あの、さ。私、なんで」

もぞりと起き出した梅宮は髪の毛が寝乱れて、まだ眠いのか気だるげな様子だ。

そのままじつと私を見るもんだから、居たたまれない。

「覚えてないのか。昨日は部の飲み会だっただろ？」

「あ、うん。鍋が美味しかったよねえ。やっぱり地鶏鍋の雑炊が最高でって、じゃない。飲み会でした」

「お前、風邪気味とかで薬飲んでただろ。その後で断りきれずに部長から酒を飲まされてへろへろになってた」

昨夜の記憶を必死でよみがえらせる。確かに梅宮の言うとおりだ。そこまではいい。問題はそれから後でなんで梅宮の部屋のコタツで二人で寝ている状況なのか、ということだ。

麦茶を飲んで口の渴きを潤す。

「悪い、ベッドに運ぼうと思っていたんだけど、どうやらここで寝てしまったみたいだ。風邪の具合はどうだ？」

「そっちは大丈夫そう。どうして私、梅宮と？」

質問すると梅宮は少し笑った。これは聞き覚えがある。営業の梅宮が狙った獲物を仕留める、もといお客様に契約印を押させようとする時のものだ。

戦略をめぐらせ、罠にかけ、自分のものにする時のなんていうか
内心の興奮を隠した、舌なめずりするような声だ。

「……へろへろで気分悪そうだったから、方向が同じ俺が送って
くつてことで一緒に帰った」

「そ、そう。それはご迷惑を。でも、ならなんでこの部屋なのかな
あって」

同僚で同期とはいえ、男の部屋に外泊なんて。

「お前途中で寝てしまって、家もよく分からないし。だから連れて
来た」

「重ね重ね申し訳ございません」

頭を下げると天板に額が触れる。穴があつたら入りたい。コタツ
の中に全身潜り込みたい。うわあ、醜態をさらした。

恐る恐る顔を上げると梅宮は少し首をかしげて私を眺めていた。

「別に。そんなに迷惑じゃなかった」

おい、そんなにつて何だ。気になるじゃないか。いやいや、私は
梅宮に迷惑をかけたんだ。ここは速やかに退却、じゃなくて部屋を
去ろう。

「本当にごめんね。来週にでも埋め合わせする。私帰るよ」

そして必需品を探す。メガネメガネ、どこだ。あれがないとま
とに歩けない。

天板の上に手をさまよわせてもメガネらしい物が見当たらない。
枕に使っていたらしいクッションの周りを手探りしてもそれらしい

物には当たらない。

「梅宮、私のメガネを知らない？」

「さあな。コートと上着はそこにかけてある。バッグは部屋の隅にある」

指をさされてそっちを見る。滲んではやけた視界の中を進んでコートや上着のポケット、バッグの中を探してもメガネがない。
どうしよう。

「……梅宮。本当に、本当に悪いんだけどメガネと一緒に探してくれない？」

「いいけど、夕飯おごれ」

「う、分かった」

それから一緒に探してもらったけどメガネはやっぱりなかった。タクシーの中にでも落としたんじゃないか、って結論付けるしかなかった。梅宮にタクシー会社を覚えているかと尋ねても、流しだったと言われてしまえばそれまでだ。

二人でコタツに入っとうなだれていると、梅宮に聞かれた。

「お前、そんなに目が悪いの？」

「そうだね。梅宮の細かい表情は分かんないや」

「どこまで近づいたら、分かる？」

「んー？」

コタツから出て梅宮の側に行く。部屋着なのかスウェットを着ている。スーッじゃない梅宮なんて初めて見るかも。

梅宮に顔を近づける。

滲んだ世界が近づくにつれて輪郭が鋭になり、対象とその他が分

離されていく。

ほとんど顔の前で私は止まった。

「ここくらいで、細かいところまで見える」

「お前……誘っているんじゃないと思うくらいの距離だな」

はい？　　とっていると梅宮がすっと目を伏せてちゅっと唇を重ねてきた。

今の何？

今何された？

最初から最後まで目はぱっちり開けていたから、梅宮の顔は良く見える。

少し太めの眉とか意外に長い睫毛とか、切れ長の二重とか、少し薄めだけど柔らかそうな唇とか、唇とか、唇とか。

「う、めみや」

「お前、隙ありすぎ」

訳の分からないことを言われて私は固まる。梅宮はコタツから出て、冷蔵庫を開けた後でこっちを見た、気がした。

「コンビニ行ってくるから、ここにいろ」

ボタンとドアが開閉されて外から鍵をかける音がする。

待て、ちょっと待て。私はさっき梅宮と、梅宮と……。ぺたりと座り込んだまま頭の中はぐるぐるとしている。

——なんで梅宮がキスをしてくる？　私達は同期で同じ部署だけど個人的なつきあいなんて全くないぞ。部屋なんて初めて入ったし、なにより私服姿ですら初めて見るような間柄なのに。

さっきの梅宮の行動の意味をとらえかねているうちに、また鍵の

開く音がした。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい」

梅宮と思われる塊がこっちに来る。なんだかえらく機嫌がよさそうだ。コタツに入って袋の中からサンドイッチだとかヨーグルトとか、ペットボトルを取り出した。

あとお泊りセットとかかかっている、一泊用の化粧品と歯ブラシ。……気が利くね。

「食べたら支度しろ。家まで送る」

「え、いいよ。タクシー呼んで帰るからさ」

「お前、予備のメガネとかあるの？」

「家にはあるから。梅宮にこれ以上迷惑かけられないし」

食べる合間に答えると、梅宮は迷惑じゃないから、ともう一度言った。

「この辺り一方通行が多くてタクシー呼びにくい。住宅街だから流しもないぞ」

そう言われてしまえばおおせに従うしかない。食べたものをまとめて袋に入れる。

顔を洗おうときよろきよろすると、梅宮が手を引いてくれた。こっちと案内されてタオルを渡される。

顔を洗って歯を磨く。ぼんやりとした視界で確認すると、随分さっぱりしている。歯ブラシは一人分。整髪料らしきものと歯磨き粉が置いてある。

バッグの中のもので簡単に化粧をして、コタツの置いてある部屋

に戻る。

「梅宮、お待たせ」

「もういいのか。その歯ブラシどうするんだ？」

「ああ、処分しようと思って」

「……なら、こっちでやるからよこせ」

歯ブラシを渡すと梅宮はまた洗面所へと消えた。そっちのゴミ箱に捨てるのかな？

上着とコートを羽織っていると梅宮も支度が済んだみたいだ。

黒いハイネックのセーターにジーンズ、ダークグリーンのコートを羽織っている。

「じゃ、出るぞ」

「お邪魔しました」

靴を履いて部屋を出ると手を引かれてエレベーターの所に連れて行かれた。

「梅宮、手は繋がなくてもいい」

「見えていないんだろ？ 危なかしいから黙って繋がれとけ」

ボタンを押した梅宮に見下ろされる。なんだかずっと梅宮のペースで、悔しい。

開いたドアに先に通されてエレベーターが下降する。手はずっと繋がれたまま。

駅に行つてホームに並ぶ。

確かに梅宮がいないと電車の行き先さえ見えない。意外に面倒見のいい梅宮の一面を知った気がした。

やってきた電車に乗り込む。休日とはいえそれなりに混んでいる中、梅宮は手を繋いだままもう片方の手をつり革を握る。

同じようにつり革につかまって電車の振動に身を任す。

これってどんな風に見えているんだろ。電車の中まで手を繋いでいるこいつらバカップルだろとかかな。

一旦手が離れて安心したら、またすぐに繋ぎなおされた。しかも。恋人繋ぎとか言われる指を絡めた繋ぎ方だ。

ちよっと待て。

見えていない私の手を引くのは、人助けとしてはアリだ。

だけど恋人繋ぎは必要性が全くない。ナシだ。

むっとして梅宮に目を向けるけど、本人は涼しい顔をしている、ような気がする。見えないって切ない。

くそう、こっちが見えてないと思って好き勝手しやがって。むかむかしながら、それ以上に繋がれている手にドキドキしながらつり革を握りなおす。

メガネをかけたら、覚えている。この恥ずかしさを絶対に埋め合わせてもらう。

電車で二駅、いつもの改札を手を繋いだまま通過する。

梅宮はあちこちきよろきよろ見ながら歩いている。

「随分雰囲気が違うんだな」

「ここは昔からの商店街だからね、小さいお店が多いけど楽しいよ」

「夜もあんまり暗くないか」

「ちよっとうるさいけどね」

たわいない話をしながら私のアパートにたどりつく。うちにエレベーターはないから階段を上がった三階に部屋がある。

「最上階か」

「これでも一応女ですから」

なぜそこで無言になる。いちいちしゃくに障る奴だ。

バッグから鍵を取り出して開ける。

ここで梅宮とはお別れ、かな？　ありがとうと言おうとしたら先を越された。

「予備のメガネをかけたところを確認するまでは帰らない」

「なんで？」

「ちゃんと見えているか確認しないと、お前危なかしすぎる」

信用されていないその言い方に、はいはいと思いながら玄関に梅宮を待たせて部屋に入る。勝手知ったる自分の部屋。ぼんやりとしか見えなくても家具の配置も、物の置き場所も覚えている。

チェストから予備のメガネを取り出してかけた。

ああ、明瞭な視界。

ほっとして玄関の梅宮に声をかける。

「梅宮、メガネかけたよー。大丈夫、ちゃんと見えているから。本当にありがとうね。今度美味しいものおごるから」

「喉渴いた」

「へ？」

「コーヒーが飲みたい」

背後に俺は恩人ですよオーラさえなかったら、速やかにお引取りを願ったんだが。

そのまま待たせて服を着替え、梅宮を招き入れる。

ダイニングテーブルの向こうで座る、梅宮。

部屋に入れた異性第一号だ。自慢するようなことじゃないけど。

コーヒーマーカ―をセットして、電源を入れる。そのうちに部屋の中にコーヒ―の香りが漂い始めた。

「インスタントじゃないんだ」

「うん、家でゆっくり飲むのが好きだからね」

買い置きしていたクツキ―を皿に出して、そのうちにドリップされたコーヒ―をカップに注いで私も席につく。好みの濃さのコーヒ―に満足して頬が緩む。

「キッチンが広いな」

「結構料理をしているからね。さっき通った商店街で買い物もできるから」

「そんなもんか」

梅宮はなおもあちこちを見回す。私だって視界良好だったら梅宮の部屋で同じことをしているだろう。あまりじろじろ見られると恥ずかしくなってはくるが。

「ごちそうさん」

「こっちこそ助かった。どうもありがとう」

じゃあな、と立ち上がった梅宮を玄関まで見送る。

「お前、メガネは作り直すのか？」

「そうだね、作ってから時間が経っているから視力チェックがてらそうするつもり」

「コンタクトにはしないの？」

「前に一度作ったことはあったけど、合わなくて」

「そうか。お前、コンタクトの方がよさげなんだけどな」

玄関でコートを羽織ながら梅宮が呟く。

「そうかな？」と首をかしげた私に笑ってひょいと手を上げて梅宮がドアを開けた。

「じゃ、帰るわ。佐伯、コーヒーうまかった」

「それなら良かった。気をつけて」

そう言って梅宮はあっさり帰っていった。

久しぶりに眼科が併設されているメガネ店を訪れたら、ふとコンタクトのパンフレットに目があった。梅宮から言われたからじゃないけど、メガネとは別にコンタクトを持っていれば今回みたいなことがあっても慌てなくてもすむ。

眼科医に相談すると、酸素透過性のよい使い捨てのソフトコンタクトレンズを勧められた。ために装着するとよさげだ。

メガネを新調し、ついでにコンタクトを一か月分購入して帰路についた。

翌週、どんな顔をして梅宮に会おうかと心配した私は肩透かしをくった。

梅宮はいつもと変わらず、見事に同僚のままだった。

こっちも安心して普通に接していたらわだかまりもすぐに消え、いつもどおりの日常が戻った。

そんなある日、梅宮が私のデスクにやってきた。

「佐伯、約束果たしてくれ」

「ああ、夕飯おごるやつね、いいよ。いつがいい？」

「もう予約したから」

ちよ、手回しいいな。さすが部の有望株。じゃなくて。
あまり高い店じゃないだろうな。

「正装な。その日はメガネじゃなくてコンタクトにしてくれ」
「ちよっと、正装って。梅宮、どんな店を予約したの？」

当日のお楽しみとか言って教えてくれなかった。コンタクトも作
ったのを口滑らせるんじゃないかと後悔してももう遅い。

戦々恐々と私は当日を迎えた。

正装して待ち合わせしたそこに、同じようにきめてきた梅宮が現
れた。

「じゃ、行こうか」

「……なんで手を繋ぐの？」

「人が多いから」

「今日はちゃんと見えているから」

「まあ。いいから」

ぐいと引っ張られ手を繋がれたまま歩き出す。

確かに人は多い。カップルが多い。そりゃそうだ、今日はクリ
スマスイブで、ここはイルミネーションが有名な場所だ。

いや、待て。なんで梅宮はこんな日を指定したんだ？

帰ってきたのは一年で一番綺麗だから。それには同意。

連れて行かれたのはおしゃれなレストランで、通されたのは個室で。

財布の中身が非常に心配になる。多めに入れては来たけど大丈夫かな。カードもあるし、なんとかなるかな？ コースを予約していたのか、飲み物をきめただけで次々と料理が運ばれてくる。

「うわあ、綺麗。すごい、美味しい」

「お前、相変わらず楽しそうに食べるな」

「いや、だって本当に美味しいもん」

デザートまで美味しくいただいて私は大満足だった。

いざ支払いとなった時に、梅宮は私を制して自分が払った。私におごれて言っていたのになんで？

席についたまま支払いも終わり、店を出ようとなった時に個室のドアの所で梅宮に問いたです。

「梅宮、夕飯おごれて私に言ったのになんで自分が払うのよ」

「俺がそうしたいんだからいいんだ」

「でも……」

「じゃあ、俺にクリスマスプレゼントをくれよ」

「何にも用意してない」

そう言ったら梅宮はにやりと笑った。あれ？ この笑い方……。

「欲しいのは目の前にあるから、もらうな」

抱き寄せられて顎を持ち上げられて梅宮の顔が迫ってくる。なんでかキスされた。抱きしめられた。

何度も角度を変えてキスされて、飲んだワインのせいか頭がくらしくしてくる。

梅宮は満足そうな息を漏らした。

そして手を繋がれたまま店を出る。そのまま有無を言わずに梅宮の部屋に連れて行かれて……。

なんで？　って聞いたら、抱き込まれながら溜息まじりに言われた。

「俺がどれだけ苦労して、色気より食い気なお前の気の置けない同期のポジション確保していたと思うんだ」

洗面所には私の歯ブラシが、梅宮のと一緒にコップに立てられていた。

後日冷蔵庫の上に布に包まれた、なくしたはずのメガネを発見して梅宮を締め上げたのは、今となってはいい思い出だ。

梅宮の計略に乗せられたのは、すこし腹立たしいけれど。

冬の散歩（前書き）

自分の足で歩くと色々発見があつて楽しい

冬の散歩

いきなり冷え込んだ季節は知らずに皮膚を固くし、背筋をこごめさせる。

マフラーを巻いて手はコートのポケットに突っ込んで、そうしてアパートのドアを開ける。

空気は澄んでいるのに冷たくて、鍵をかけている間でさえ手が凍えていく。

今日は徒歩での移動。

飲み会の翌日だから、車は置いてきている。それを取りにいくための短い散歩。

普段なら気にも留めずに通り過ぎるだけの景色は、今日はゆっくりと目に入る。

側溝にたまった落ち葉とか、意外に凝っているマンホールの意匠だとか。

天気がいいのは救いだけど放射冷却で寒さが身に染みる。暖かそうな室内から悠然と外を眺めている猫の艶やかな毛並みに撫でたい、と内心で大声を上げる。

歩行者用の横断歩道も渡るのは久しぶりだ。のんびりと道を横切って冬の街並みを歩く。

時間に追われずに歩けるのは、ある意味贅沢なのかもしれない。ケーキ屋の前を通って華やかな飾りつけに目を引かれる。前に遊びに来た海外の友人が、日本のケーキは最高と感激していたが確かに甘さ控えめな美しいデコレーションは見ているだけでも楽しい。まあ、その友人は和菓子にも感激して、これぞ日本文化と力説していたが。

帰りに買っていかうかなと甘い誘惑に流されそうになってしまった。

交差点を左折して上り坂になる。ふと生花店の店先に可愛らしく飾られているブーケに足が止まった。店から可愛い女の子が笑顔で出てくる。

「可愛いでしょう。おすすめですよ」

そういえば最近はずいぶん花を飾ると思ってもよらなかった。アパートの自室もよく言えばシンプルだけど、悪く言えば殺風景だ。ワンコインの値段もお手ごろだし、つい買ってしまった。可愛いブーケを手にとって歩くのはちよつと気恥ずかしいが、これも散歩の小さな記念と割り切ることにした。

職場の駐車場について、このまま帰るかとも思ったけれど週末に読みたい本を職場に置いていたから建物に入る。人の少ない屋内を歩いてエレベーターで昇る。

デスクで目当ての本を手にして、さて帰るかと部屋をでようとする。

タイミングが悪いことに、携帯が鳴った。

「はい」

「今、どちらにいらっしゃいますか？」

「うん、医局」

「良かった、患者様のご家族が急にいらして話を伺いたいとおっしゃっています」

「……今、いきます」

どの患者さんのご家族だろう。まずはナースステーションでカルテを確認、説明のために簡単に書かれてある人体の本も持っていない。願わくば説明は一度で終われると嬉しい。遠方の子供、兄弟とばらばらと来ては同じように説明を求められると、いつも最

初の説明を収録してそれを再生したい気分になれる。やりはしないし、その度ごとに真摯にしっかりと説明はするけれど。

でもせっかくの休日だったのにな。

溜息をついて白衣をはおり、携帯の電源を落として下の病棟へ行く。こうとして机の上のブーケに気付く。

このままだと萎れてしまうかも。

花瓶なんてしゃれたものはない。結局インスタントコーヒーの空き瓶に水を入れてブーケを突っ込む。色気もなにもあったものじゃない。

気を取り直して聴診器を掴み、仕事の顔に切り替える。

どうせ説明の後で病棟業務を押し付けられて、そのうちに急患の応援とかに引っ張り込まれるに違いない。預言者のようにこの後の流れが目に見えかぶ。

短い散歩は終わって、日常の延長が始まった。

でも仕事が終われば可愛い花が待っているかと思うと、まあ悪くない気がした。

良い筋肉は良い骨格に宿る（前書き）

適当な医学・解剖学用語が満載。内容はマニアックです。

良い筋肉は良い骨格に宿る

つい、おおおっと感嘆の声を上げたのを聞きとがめられた。

「早川、どうした？　なんか面白い症例か？」

「ああ、ごめん。いや、このボランティアの画像がものすごく綺麗でさ」

三面モニターに各種撮像した画像を分割で描出していたのを、一つのモニター全体に一つの大きな画像がでるように調整した。

CTとMRI、PETで撮像されている。ボランティアとはいえ一日仕事だ、大変だっただろうに。

「綺麗？」

「そうだよ、松本、見てごらんよ。萎縮のない左右対称の脳室、緻密で梗塞の心配もない脳実質。脳動脈だって蛇行すらないんだよ」

次いで胸腹骨盤部のCTに切り替え。肺野、縦隔異常なし。腹部臓器に異常なし。

異常がないのが素晴らしい。上から下までスクロールしてついうっとりしてしまう。

松本はそんな私に思いっきり不審者を見る眼差しだ。

「胸水、腹水なし、動脈硬化なし。病的腫大リンパ節なし。素晴らしい」

「——そんなのボランティアだったら当然だろう」

「いやいやいや。偶発的に見つかる所見すらないんだよ。すごくない？」

「俺はお前の感性が分からね」

何と言われようと美しい。何度か見返して見逃しがないか確認する。

そして幾通りかに加工した画像を呼び出す。

冠状段に矢状段、骨条件、そして3D。くると回転させて骨格を確認。

「いいねえ、この緻密さ。配列の美しさ」

「ボランティアなんて若い奴だろう。当然じゃないか」

「このCT値にひれ伏せ。見事な骨じゃないか」

でもなあ、骨格もそるんだが、何よりいいのが。

「この筋肉、好みだなあ」

横で松本がむせる。もう一度CTの横断像にしたものを見ていく。

「肩甲部周囲の筋や僧帽筋に広背筋、胸筋もいいけど。この腹横筋と腹斜筋、殿筋群の発達を見てよ。これは鍛えているわ。し、かも。この腸腰筋と脊柱起立筋のすごいこと。良い筋肉は良い骨格に宿るんだねえ」

内臓脂肪の少なさも注目すべきなんだが、この筋肉。

絶対腹筋は割れているだろう。想像するだけでうっとりしてしまう。

「……早川、お前変態か？」

「失礼な。健康で正常に発達しているものを愛でて何が悪い」

こんな文句なく美しい肉体。日々腹の中まで観察している自分に

とって、健康なのは何より重要なことなのだ。

頭の先から爪先まで有意な所見がないというのは、ボランティアでも珍しい。

たいてい職員がボランティアをやるが、大なり小なり何か見つかるはずなのに。

「このデータ、個人的に保存したいな。こんな綺麗な滅多にお目にかかれない」

「……そうか」

同意するのも疲れたような松本をよそに、あれこれと条件を変えてこの画像を観察しまくる。

骨盤のところにきて、ふいに松本が挑発するように身を寄せた。

「なあ。ここはどう思う？」

「どうって？」

「サイズ」

そこはいわゆる……な場所です。

「平常時のサイズってこと？ 普通じゃないの。なんなら計測しようか？」

計測ツールをクリックして、曲線距離計測モードに変更する。
ここからここまでで、うん、普通。

「普通だね」

「普通かよ。というか、お前、そこは恥じらいを持って」

「画像に恥じらいなど不要じゃない？ 第一重要なのは平常時ではなく、膨張率でしょ？」

「ぼ、膨張率とかいうな。こっちが恥ずかしい」

ずばりな医学用語で言う方が恥ずかしい気がすると思いますが、やけに絡む松本が不思議だ。異常がないか気にはするが、画像を見ながら羞恥を覚える方が変態ではないだろうか。

仕事で欲情なんかしてられない。

「でも本当に美しい画像だ。このボランティアさん誰だろう」

本体はこれに皮膚と服が付くから見当がつかない。ここの職員に、こんなに魅力的な肉体を持つ人がいるんだ。

職員検診で全員の胸部は知っていても、この人が誰かは分からない。

「気になるか？」

「そうだね、この筋肉と骨格はそそる」

キヤスター付きの椅子に座っていた松本が立ち上がった。モニターと入力用、カルテ閲覧用の複数のモニターがコックピットのようにになっているデスクの前に陣取る私の後ろから、囲うように腕を広げて手をデスクについた。

片手はマウスに乗せた私の手の上だ。

いきなりな行動に、頭がついていかない私の耳元に背後から顔を寄せて。

「なら、直接確かめるか？」

「何を？」

「この筋肉と骨格。触診でも視診でも、存分にやれば？」

首をひねって見上げれば、意地悪そうな松本がいる。

この展開はまさか、なのか？

「これって……」

「そう。ついでに膨張率も確認しろ」

「今まで生きてきた中で最低の誘い文句だ」

筋肉のせいか体温の高い松本の手がぎゅっとマウスごと私の手を覆う。

「人の体上から下まで舐めまわしやがって。弄ばれたんだ。責任取れ」

「誤解を招く言い方はやめよう。私は舐めるようには見たけど、舐めてはないよ」

人を変態扱いしたくせに、その言い方はないんじゃないか。
精一杯の抵抗を試みるが、松本の包囲網は残念ながら狭まった。

「よだれこぼしそうな口元だった。実物は、見たくはないか？」

見る――視るでも診るでもいいけど、それが仕事な私にその殺し文句を言う？

充分君も変態だと毒づきながら、取りあえずこのデータを保存して実物と比べるのも悪くはないんじゃないかと、どこかずれた感想を抱いた。

松本から私はボランティアをやらないのかと聞かれたが。

――胸の大きさがばれるだろうが。

遅刻（前書き）

遅刻はよくない。待たされるほうのメンタルに大ダメージ

遅刻

彼は遅刻魔だ。

メールで確認しても、前日携帯で注意していても、私との約束には遅れてくる。

心配でなにかあったんじゃないかと携帯にかけたり、メールをしても反応はない。

じりじりと待ちながら、これで何日目だろうと考える。

約束の時間はとくに過ぎて座りこみたくなった頃に、彼は現れる。

「ごめんな。寝過ごして」

寝過ごしてのほかは出がけに用事とか、気分が乗らなくてとか、他の人から電話がかかってきてとか、メールが入ってとか。

ごめんと言いながら悪びれた様子はない。私がうんざりとし気持ちでバッグを握るとそれに気付かず腹減った、何か食べようと歩き出す。

そのくせ待つのが嫌いなのだ。

映画館でもチケット販売の列に並ぶと、段々機嫌が悪くなる。それならと思ってネット購入していたのに、ねえ、もう上映時刻は過ぎちゃった。

クレジットで無駄に引き落とされる二枚分のチケットと空席の映画館。

中央のいい席を購入したのに。アクションは映画館に限るって言っていたのに。

それを指摘すると途端に不機嫌になる。

「悪かったよ。今度は遅れないから。今日はお前の好きなところに行こう」

結局本屋に行って、彼の好きな店に行って。中途半端な時間に食べたせいで夕食は食べる気にならずに駅で別れる。電車の中で仲のよさそうな二人連れを眺めながら、自分って何だろうと自問する。彼に告白したのは私の方だ。惚れた弱みはこっちにある。

そう思って付き合ってきたけれど、彼は私との約束を守らない。遅れるなら遅れると連絡があればまだいい。こっちからの連絡に応じてくれれば、まだいいと思える。それすらなしで平然とした顔で現れる。

いつもごめんって言うけれど本心から？

積み重なるたびに何かが削り取られていくような気がする。私の自尊心だったり、彼を好きだと思える気持ちだったり、彼への信頼だったり。

最初に待たされてしまうせいで、私は楽しい気持ちになれない。告白して受け入れてもらえたときは、顔を見るだけで嬉しかったのに。

今では会っている最中は気分が乗らず、別れて一人になると気分が重くなる。

溜息をついている自分に気付いた時に、賭けをしようと思った。

「次は遅れないで」

そう念押しをした。彼は分かった分かったと軽く返した。

最初に遅れた時には、次は遅れないでと告げた。

二度目に遅れた時は、お願いだから遅れないでと告げた。

三度目に遅れた時は、絶対に、絶対に遅れないでと告げた。

私は時計に目をやる。約束の時間から一時間が過ぎていた。

「ごめん、悪い。携帯のアラーム、寝ぼけて止めたみたいで」

私を認めて手を上げて近寄ってきた彼を見つめる。仕事に打ち込む横顔が好きだった。よく通る、少し低めの声が好きだった。

大きな骨ばった手が好きだった。目を細めて笑う仕草も好きだった。

今も好きだ。でも、賭けに負けてしまった。

「もういいよ」

「ほんとごめん、お詫びに好きなものおごるから」

「だから、もういいよ。私におごらなくてもいい。もうやめるから」
「やめるって何を？」

彼はわけが分からないといった体で私を見つめる。

うすうす気付いていた。私が好きなほどには彼は私を好きではないのだろうと。

仕事で遅刻をしない彼が私との待ち合わせで遅刻をするのは、私を軽く見ているからだ。

好きだから目をつぶろうとした。でも、ごまかしようがなかった。

「もうあなたと待ち合わせをするような付き合いはやめるってこと」

「ちよっと待てよ、それって」

「別れよう」

短く言って彼の横をすり抜ける。

「ちょっと待てよ。いきなり何だ、俺は納得できない」

「――今まで何回遅刻した？」

「は？ 今は遅刻の話じゃなくて別れ話なんだろう」

彼につかまれた腕を振りほどく。強張った顔の私を見て、彼もようやく私が本気だと悟ったみたいだ。肩にかけたバッグを脇に抱きしめる。

「言ったよね。『次は遅れないで』って。この前は『絶対に、絶対に遅れないで』って。私、賭けをしたんだ。遅れないでって念押しをしてそれでも三回遅刻するようなら四度目はもう、ない。それが今日」

「何だよそれ。言ってくれば俺だって」

「何回も言ったよ。その度に分かったって言ったじゃない」

彼は気まずそうに黙りこんだ。

好きだから待っていられたんだ。でも、私ばかりが待ち続けるうちに大事にされていないんだ、と惨めになった。

これ以上待ち続けたら、きっと彼を嫌いになる。被害者ぶって彼を責めてしまう。

その前に離れよう。そう決めて賭けをした。

「私は忠犬じゃないよ。待って気まぐれに現れたご主人様に尻尾は振れない。じゃあね」

彼は呆然とその場に突っ立って私が立ち去る邪魔はしなかった。人の波にまぎれてとにかく早足で歩く。泣くのを我慢していると顔が歪むのが分かる。

自分で別れるって決めたのにすごく苦しい。心臓はばくばくしているし、胸はきりきりと痛む。

愛想はかなり尽きてはいるけれど、まだ好きだから余計に辛い。

結局あちこちをぶらついて私は家に戻った。マンションの入り口に見覚えのある人影が立っている。オートロックだから中には入れなかったか。

くるりと逃げ去ろうかと思ったけれど、足に力を入れて自動ドアを通り過ぎる。

彼を見ないように開錠操作をして内側のドアを開けた。彼は追っではこなかった。

そのままエレベーターに乗って部屋に戻った。

コートとバッグをソファに置いて、ベッドに倒れこむ。

どうして彼はマンションで待っていたんだろう。どうして何も言わないんだろう。

天井をぼんやり見ながらどうしてと思っていたら、メールの着信音が聞こえた。

彼からだった。

『本当に悪かった。反省している。俺は甘えていた。待っていてくれるだろうって考えていた。無表情で別れようって言われたのが堪えた。ひどいことをしたと自覚している。すみませんでした』

週明け、会社で顔を合わせた時に彼はどうするだろう。

私はどうするだろう。

大人の決断はひどく苦い。割り切れない。

彼は待っていた間に何を思ったんだろう。じりじりと待つ辛さを少しでも味わったんだろうか。

もし、彼から誘われるようなことがあったら。私は彼を待つんだ
ろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3579s/>

アラカルト（短編集）

2011年12月21日01時51分発行